令和2年度　菁菁館三年　現代文B

檸　檬

梶井基次郎

①えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終おさえつけていた。焦燥といおうか、嫌悪といおうか――酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやってくる。それが来たのだ。これはちょっといけなかった。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなった。蓄音器を聴かせてもらいにわざわざ出かけていっても、最初の二、三小節で不意に立ち上がってしまいたくなる。何かが私を居たたまらずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

②なぜだかその頃私はみすぼらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。雨や風が蝕んでやがて土に帰ってしまう、といったような趣のある街で、土塀が崩れていたり家並みが傾きかかっていたり――勢いのいいのは植物だけで時とすると吃驚させるような向日葵があったりカンナが咲いていたりする。

③時々私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか――そのような市へ今自分が来ているのだ――という錯覚を起こそうと努める。私は、できることなら京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行ってしまいたかった。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂いのいい蚊帳と糊のよく利いた浴衣。そこで一月ほど何も思わず横になりたい。希わくはここがいつの間にかその市になっているのだったら。――錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵の具を塗りつけてゆく。何のことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

④私はまたあの花火というやつが好きになった。花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵の具で赤や紫や黄や青や、様々の縞模様を持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠花火というのは一つずつ輪になっていて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心を唆った。

⑤それからまた、びいどろという色硝子で鯛や花を打ち出してあるおはじきが好きになったし、南京玉が好きになった。またそれを嘗めてみるのが私にとって何ともいえない享楽だったのだ。あのびいどろの味ほど幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなって落魄れた私に蘇ってくるせいだろうか、全くあの味には幽かな爽やかな何となく詩美といったような味覚が漂っている。

⑥察しはつくだろうが私にはばまるで金がなかった。とはいえそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰めるためには贅沢ということが必要であった。二銭や三銭のもの――といって贅沢なもの。美しいもの――といって無気力な私の触角にむしろ媚びてくるもの。――そういったものが自然私を慰めるのだ。

⑦生活がまだ蝕まれていなかった以前私の好きであった所は、例えば丸善であった。赤や黄のオードコロンやオードキニン。

目標

- 「不吉な塊」に対する理解を深める。
- 「私」の嗜好の変化を整理する。
- 「私」の内面理解を深める。
- 「私」の行動に、自分との共通点を見出す。

第一場面：「私」の置かれた状況

えたいの知れない不吉な塊が
私の心を始終おさえつけていた

不吉な塊とは？

焦燥といおうか、嫌悪といおうか

何に焦燥？何を嫌悪？

酒を飲んだあとに宿酔がある
ように
酒を毎日飲んでいると
宿酔に相当した時期がやってくる

それが来たのだ
肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない
借金などがいけないのではない

×病気、借金

いけないのはその不吉な塊だ
←
始終私は街から街を浮浪し続けていた

なぜみすぼらしいもの？

私はみすぼらしくて美しいものに強くひきつけられた

壊れかかった街
裏通り（汚い洗濯物、むさ苦しい部屋）
花火（安っぽい絵の具模様の花火の束）
おはじき
幽かな爽やかな何となく詩美といったような味覚
→
幼時の甘い記憶が落魄れた私に蘇ってくるせい？

⇔

蝕まれた生活とは？

生活がまだ蝕まれていなかった以前
好きであった所は丸善
赤や黄のオードコロンやオードキニン
香水壜。煙管、小刀、石鹸、煙草

美しいもの

⇔

なぜ嗜好が変化？

その頃の私にとっては重くるしい場所
書籍、学生、勘定台 ← 借金取りの亡霊

洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮き模様を持った琥珀色や翡翠色の香水壜。煙管、小刀、石鹸、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費やすことがあった。そして結局いっとういい鉛筆を一本買うくらいの贅沢をするのだった。しかしここももうその頃の私にとっては重くるしい場所にすぎなかった。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取りの亡霊のように私には見えるのだった。

⑧ある朝――その頃私は甲の友達から乙の友達へというふうに友達の下宿を転々として暮らしていたのだが――友達が学校へ出てしまったあとの空虚な空気のなかにぽつねんと一人取り残された。私はまたそこからさまよい出なければならなかった。何かが私を追いたてる。そして街から街へ先に言ったような裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ちどまったり、乾物屋の乾し蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、とうとう私は二条の方へ寺町を下がり、そこの果物屋で足をとめた。ここでちょっとその果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であった。そこは決して立派な店ではなかったのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な台の上に並べてあって、その台というのも古びた黒い漆塗りの板だったように思える。何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面――的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリウムに凝り固まったというふうに果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆくほど堆高く積まれている。――実際あそこの人参葉の美しさなどはすばらしかった。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。

⑨またそこの家の美しいのは夜だった。寺町通りはいったいに賑やかな通りで――といって感じは東京や大阪よりはずっと澄んでいるが――飾り窓の光がおびただしく街路へ流れ出ている。それがどうしたわけかその店頭の周囲だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条通りに接している街角になっているので、暗いのは当然であったが、その隣家が寺町通りにある家にもかかわらず暗かったのがはっきりしない。しかしその家が暗くなかったらあんなにも私を誘惑するには至らなかったと思う。もう一つはその家の打ち出した廂なのだが、その廂が眼深にかぶった帽子の廂のように――これは形容というよりも、「おや、あそこの店は帽子の廂をやけに下げているぞ。」と思わせるほどなので、廂の上はこれも真っ暗なのだ。そう周囲が真っ暗なため、店頭に点けられた幾つもの電灯が驟雨のように浴びせかける絢爛は、周囲の何者にも奪われることなく、ほしいままにも美しい眺めが照らし出されているのだ。裸の電灯が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ刺し込んでくる往来に立ってまた近所にある鎰屋の二階の硝子窓をすかして眺めたこの果物店の眺めほど、その時々の私を興がらせたものは寺町の中でもまれだった。

⑩その日私はいつになくその店で買い物をした。というのはその店には珍しい檸檬が出ていたのだ。檸檬などごくありふれている。がその店というのもみすぼらしくはないまでもただあたりまえの八百屋にすぎなかったので、それまであまり見かけたことはなかった。いったい私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵の具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈の詰まった紡錘形の恰好も。――結局私はそれを一つだけ買うことにした。それからの私はどこへどう歩いたのだろう。私は長い間街を歩いていた。始終私の心をおさえつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛んできたとみえて、私は街の上で非常に幸福であった。あんなにしつこかった憂鬱が、そんなものの一顆で紛らされる――あるいは不審なことが、逆説的な本当であった。それにしても心というやつは何という不可思議なやつだろう。

何かが私を居たたまらずさせる
←
街から街を浮浪し続ける

なぜ放浪？
なぜ錯覚？

京都から何百里も離れた市へ今自分が来ているのだという錯覚を起こそうと努める。
→
京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行ってしまいたかった。

第二場面：檸檬との出会い

その頃私は甲の友達から乙の友達へというふうに友達の下宿を転々として暮らしていた
友達が学校へ出てしまったあとの空虚な空気のなかにぽつねんと一人取り残された。
私はまたそこからさまよい出なければならなかった
→
何かが私を追いたてる。

なぜ？

始終私の心をおさえつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛んできた
非常に幸福

なぜ？

不審なことが、逆説的な本当であった。
心は不可思議
←

「逆説的」とは？

軽やかな昂奮に弾んで、一種誇りかな気持ち
思いあがった諧謔心
何がさて私は幸福

果物屋
最も好きな店
立派な店ではなかった
果物や固有の美しさ

檸檬
単純な色
丈の詰まった恰好
↓一つだけ買う

⑪その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかった。その頃私は肺尖を悪くしていていつも身体に熱が出た。事実友達の誰彼に私の熱を見せびらかすために手の握り合いなどをしてみるのだが私の掌が誰のよりも熱かった。その熱いせいだったのだろう、握っている掌から身内に浸み透ってゆくようなその冷たさは快いものだった。

⑫私は何度も何度もその果実を鼻に持っていっては嗅いでみた。それの産地だという力リフォルニヤが想像に上ってくる。漢文で習った「売柑者之言」の中に書いてあった「鼻を撲つ」という言葉がきれぎれに浮かんでくる。そしてふかぶかと胸いっぱいに匂やかな空気を吸い込めば、ついぞ胸いっぱいに呼吸したことのなかった私の身体や顔には温かい血のほとぼりが昇ってきて何だか身内に元気が目覚めてきたのだった。

……

⑬実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が、ずっと昔からこればかり探していたのだと言いたくなったほど私にしっくりしたなんて私は不思議に思える――それがあの頃のことなんだから。

⑭私はもう往来を軽やかな昂奮に弾んで、一種誇りかな気持ちさえ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のことなど思い浮かべては歩いていた。汚れた手拭いの上へ載せてみたりマントの上へあてがってみたりして色の反映を量ったり、またこんなことを思ったり、

⑮――つまりはこの重さなんだな。――

⑯その重さこそ常々私が尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの重さはすべての善いものすべての美しいものを重量に換算してきた重さであるとか、思いあがった諧謔心からそんな馬鹿げたことを考えてみたり――何がさて私は幸福だったのだ。

⑰どこをどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前だった。平常あんなに避けていた丸善がその時の私にはやすやすと入れるように思えた。

⑱「今日は一つ入ってみてやろう。」そして私はずかずか入っていった。

⑲しかしどうしたことだろう、私の心を充たしていた幸福な感情はだんだん逃げていった。香水の壜にも煙管にも私の心はのしかかってはゆかなかった。憂鬱が立てこめてくる、私は歩き回った疲労が出てきたのだと思った。私は画本の棚の前へ行ってみた。画集の重たいのを取り出すのさえ常に増して力が要るな！　と思った。しかし私は一冊ずつ抜き出しては見る、そして開けては見るのだが、克明にはぐってゆく気持ちは更に湧いてこない。しかも呪われたことにはまた次の一冊を引き出してくる。それも同じことだ。それでいて一度バラバラとやってみなくては気が済まないのだ。それ以上はたまらなくなってそこへ置いてしまう。以前の位置へ戻すことさえできない。私は幾度もそれを繰り返した。とうとうおしまいには日頃から大好きだったアングルの橙色の重い本までなおいっそうの堪え難さのために置いてしまった。――何という呪われたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。私は憂鬱になってしまって、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。

⑳以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に眼を晒し終わって後、さてあまりに尋常な周囲を見回す時のあの変にそぐわない気持ちを、私は以前には好んで味わっていたものであった。……

㉑「あ、そうだそうだ。」その時私は袂の中の檸檬を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。「そうだ。」

㉒私にまた先ほどの軽やかな昂奮が帰ってきた。私は手当たりしだいに積みあげ、また慌ただしく潰し、また慌ただしく

第三場面：奇妙なたくらみ

平常あんなに避けていた丸善がその時の私にはやすやすと入れるように思えた　なぜ？

←

ずかずか入っていく

私の心を充たしていた幸福な感情はだんだん逃げていった

憂鬱が立てこめてくる　なぜ？

画本

以前にはあんなに私をひきつけた一枚一枚に眼を晒し終わって後、さてあまりに尋常な周囲を見回す時の変にそぐわない気持ちを、以前には好んで味わっていた

築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取り去ったりした。奇怪な幻想的な城が、その度に赤くなったり青くなったりした。

㉓やっとそれは出来上がった。そして軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂に恐る恐る檸檬を据えつけた。そしてそれは上出来だった。

㉔見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまって、カーンと冴えかえっていた。私には埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

㉕不意に第二のアイディアが起こった。その奇妙なたくらみはむしろ私をぎょっとさせた。

㉖――それをそのままにしておいて私は、何食わぬ顔をして外へ出る。――

㉗私は変にくすぐったい気持ちがした。「出ていこうかなあ。そうだ出ていこう。」そして私はすたすた出ていった。

㉘変にくすぐったい気持ちが街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けてきた奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなにおもしろいだろう。

㉙私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰まりな丸善もこっぱみじんだろう。」

㉚そして私は活動写真の看板画が奇体な趣で街を彩っている京極を下がっていった。

※

肺尖カタル…肺結核の初期症状。
中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき…いずれも花火の名称。
びいどろ…ガラスのこと。
南京玉…陶製またはガラス製の、穴のあいた小さな玉。
丸善…洋書や輸入雑貨専門の商店の名。
オードコロン…香水の一種。
オードキニン…液体の養毛剤の一種。
切り子細工…切り込み細工をしたガラス器。
ロココ…有八世紀半ばに流行した装飾様式。複雑な曲線模様を特徴とする。
快速調…音楽の速度標語の一つ。速く。
ゴルゴン…ギリシャ神話に出てくる三人姉妹の怪物。
ヴォリウム…ここでは、量感の意。
慈姑…地下の球茎を食用にする。
驟雨…急に降り出し、まもなくやんでしまう雨。
鎰屋…商店名。当時、一階が菓子店、二階は喫茶店。

第一のアイディア　（軽やかな昂奮）
本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、
檸檬で試す
奇怪な幻想的な城の頂に檸檬を据えつけた
←
檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまって、カーンと冴えかえっていた
埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした

どんな気持ち？

第二のアイディア　（変にくすぐったい気持ち）
美術の棚へ檸檬爆弾を仕掛け、丸善を大爆発させるという想像
←
どんなにおもしろいだろう

どんな気持ち？

←

活動写真の看板画が奇体な趣で街を彩っている京極を下がっていった

どんな効果？

今回の内容整理について
内容整理はしていますが、小説なので内容を整理しただけでは十分に読み取ることはできないでしょう。読みを深めるために考えてみてほしい所には青地に黒文字で疑問をつけています。是非考えてみてください。
なお、緑地に書いている疑問は語彙の知識です。調べてみてください。